

17 世紀から 19 世紀前半期の中国対日貿易に関する研究
The Research of Silk Trading Between China and Japan
from the 17th Century to the First Half of the 19th Century

梁 灝 * 方 蘇春

聖泉大学研究生 *

Liang Hao * Fang Suchun

Research Student of Seisen University *

要 約

本研究は日中貿易史の中で、17 世紀から 19 世紀前半期の中国対日貿易の中における糸貿易事情を考察することを目的とする。

経済がグローバル化している現代社会は、歴史上、時代によって制限されたことが多かった貿易活動のありさまを想像しにくいだらう。筆者は、先輩の方たちはどんな方法で商売を行ったか、どんな思いでいくつの山や海を越えて、高いリスクを抱えながら生活に必要な商品を届いたことに興味を持ち、本研究を始めた。

生糸というのは蚕が吐いたものを加工したものである。当時の中国の生糸製造技術は世界でもっとも優れていた。生糸で加工した織物や製品は軽くてきれいに見えるので、西方の商人はシルクと呼ばれて、日本でも人気商品だった。日本と中国の商人は日本の需要を満たすために東アジアと東南アジアの海路に往復し、品質のよい生糸や糸製品を日本に持って来た。そして当時日本風の糸織がすでに発展したので、生糸は原料として主な輸入品になった。しかし中国の貿易政策と政治は不安定要素が多かったため、日本への生糸貿易を脅かす可能性が高いと予見された。自国の需要を満たすために、日本の養蚕業は時代とともに成長、成熟した。そして織技術の進歩とともに、国際市場のブランドになって、19 世紀から 20 世紀前半に日本のシルク製品は中国の有力競争者になった。本文は以上の内容で諸視点のもとに、先行研究のデータの整理に力を入れて、データや文献記録の分析よって、17 世紀から 19 世紀における中国の対日投資について糸貿易を中心に考察した。

Key Words : 17~19 世紀日中貿易 中国糸 (silk) 唐船 生糸貿易量 日本糸の発展

1. 研究目的

17世紀から19世紀前半期は中日貿易の歴史において、最も変化の著しい時期である。日本社会の経済状況の変化に伴って、中国の対日貿易は活力に満ちていた。なお、数多くの商品の中で生糸、磁器、漢方薬原料、書籍、食品などはこの時期の対日貿易の主役であるが、時期ごとに様々な変化が発生した。

本研究は、17世紀から19世紀前半期における中国から輸入された生糸の価格と数量の変化、およびこれらの貿易が当時の日本経済と社会に与えた影響、そしてこの時期における日中貿易の特徴を考察することを目的とする。

2. 研究方法

主な研究方法は文献検索である。具体的に言えば、歴史のデータと先行研究を参照すると共に、説明できる貿易問題をデータの比較分析の中で明らかにしてみた。本研究は歴史学の四つの要素：時間、空間、歴史、史論の構造理論に基づいて完成させたものである。要するにどんな時期で起こり、何が起きた、どんな意味があるかを論文の内容構造として完成させたものである。データはほとんど先行研究のまとめりである。データをより見やすくするために、表と図に編集した。

当時の貿易の環境と時代の背景を紹介しながら、糸貿易について、当時の値段と社会、政府の態度を具体的に記述した。糸の貿易量は表と図に整理して、そしてデータの変化の中で特に糸貿易量の減少に注目して、さらに関連のデータを収集した上で、その原因を調査した。以上の内容を総合して研究結果として述べた。最後は研究結果がもたらす意義をまとめた。

3. 14世紀から16世紀中国明朝の対外貿易形式

14世紀から16世紀（日本は正安2年から慶長4年）の明朝の主な対外貿易の形式は朝貢貿易であった。その前の元朝では紙幣の発行はインフレを導いたので、明朝初期の政府はあえて貨幣を使わない貿易体制を実行し、対外貿易は商品交換とする朝貢貿易の形で行った。つまり、「朝貢貿易」という民間貿易を外国の為替相場の影響を受けないような貿易体制を取った。

日本室町幕府の将軍足利義満は朝貢貿易を積極的に付き合った。彼の時代をはじめ、明永楽十七年から嘉靖二十六年の128年間、日本は正式に貿易船を17回中国に送った。日

本の貿易船は自国の土産を載せて明朝に来航、そして絹、生糸、本などを主な商品として載せて帰った。明朝の来航も絹などを載せる場合が多かった。しかし嘉靖二年の争貢の役の後、朝貢貿易の貿易は事実上終わった。後の隆慶時代は民間の対外貿易に緩和したが、日本への貿易は禁止された。1592-1598年の間は万曆朝鮮戦争（日本は文禄、慶長の役）が発生したため、貿易にも悪い影響が与えられた。これらの原因によって、この二百年は、日本は中国の敷いた冊封体制から抜け出し、マニラなどの東南アジア諸国の関係はかなり発展した。中国の商人達もマニラを通して中日を往復、両国の貿易は密輸の形式で行った。

4. 17世紀から19世紀前期の中国産生糸の対日輸出

17世紀（慶長年間）から中国産生糸の対日輸出は繁盛だった。繁盛の原因は以下のことが考えられる：（1）日本の生糸の生産は需要を満足できなかったが、中国の生産量は日本の需要を満足させることが可能であった、（2）生糸の貿易は利益があった、（3）中国政府は対日貿易に消極的であったが、日本政府は貿易を支持した。これらを支持する考察は以下で述べる。

生糸はこの時期における中国の対日貿易の代表的な商品である。明後半期の日本は織物の制作技術はすでに著しい発展があったが、原料生産は日本自国の需要はまだ満足できなかった。スペイン人の記述によると、当時の日本は毎年220,500kgの生糸を使用した。自国は豊作の年でさえ生糸生産量は94,500kgから126,000kgにとどまっていた。需要に満たないので生糸の値段はあがり、製品の絹の値段も極めて高かった。素絹100gは銀2両、花絹100gは銀3,4両、紅い絹100gは銀7,8両まで高かった。そして長さが三丈に満たない場合、600gごとに銀2.5両になった。このような長さや値段は中国の同じ商品の何倍の差があり、普通の日本人はこのような購買力がなかったため、生糸の他、安くて見栄えがいい中国産織物は日本人に歓迎された。スペイン人の記述によると、「毎年、中国より輸入された数千万枚のシングルカラーや刺繍があるバルベツト、そして、シングルカラーの琥珀織、絹、薄羅紗、また各種の布地は売れ尽され、日本人の男女に問わず各種の彩りの服を着ている。少女であれ、未婚女性であれ、五十歳以上の老婦人であれ、皆これらを着ている。」当時の日本も自分の特徴がある紋様と製法が形成されたため、生糸や絹などを中国に求める時期であった。

膨大の需要と利益、それに日本政府の奨励は中国の商人を魅了した。1610年の後半で徳川家康は禁止令を犯して日本に着いた中国商人を静岡城(駿府城)へ誘ったことがある。徳

川家康は中国商人に日本へ自由に出入りできる赤印の文書を与え、渡航安全と日本での貿易活動の保護を約束した。万暦四十六年(1618年)日本に到着する劉鳳岐によると、「万暦三十六年長崎に着く明朝の商人は20人も足りなかったが、十年も経たないいまは二、三千人になり、日本諸島を合計すると、約二、三万人に上る。」

明から清に変わる時代も、対日の生糸の貿易は維持されたが、17世紀後半期の生糸の貿易量はかなり減った。明末清初唐船輸入生糸数量は日本の学者岩生成一(1953)によって次のようにまとめられている(表1)。

表1 明末清初唐船生糸輸入高(岩生成一, 1953)

年次	年次(西暦)	生糸輸入総数(斤 ¹⁾)	唐船輸入数(斤)	総数の唐船輸入の割合(%)	
崇禎	10年	206639	15000	7.3	
	12年	1639	60670		
	13年	1640	361428	91902	25.2
	14年	1641		113355	
	15年	1642	105500	57377	54.4
	16年	1643	119664	53046	44.3
	17年	1644	137432	46506	36
順治	2年	1645	188668	138261	73.3
	3年	1646	174414	105075	60.2
	5年	1648	65835	13559	20.6
	6年	1649	168108	92564	55
	7年	1650	235727	166886	70.8
	8年	1651	143802	71157	49.5
	9年	1652	225895	187500	83
	10年	1653	195520	142481	72.9
	11年	1654	174980	139631	79.8
	12年	1655		177784	
	13年	1656	234664	188651	80.4
14年	1657	127096	112384	88.4	
15年	1658		135720		
16年	1659	263368	229891	87.3	
17年	1660		201383		
18年	1661	254145	211427	83.2	
康熙	元年	1662	356771		
	2年	1663	47614		
	3年	1664		119208	
	4年	1665	298271	163042	54.7
	10年	1671		50000	
	13年	1674		220000	
	15年	1676		133282	
	19年	1680		190858	
	21年	1682		173322	
	22年	1683		11291	

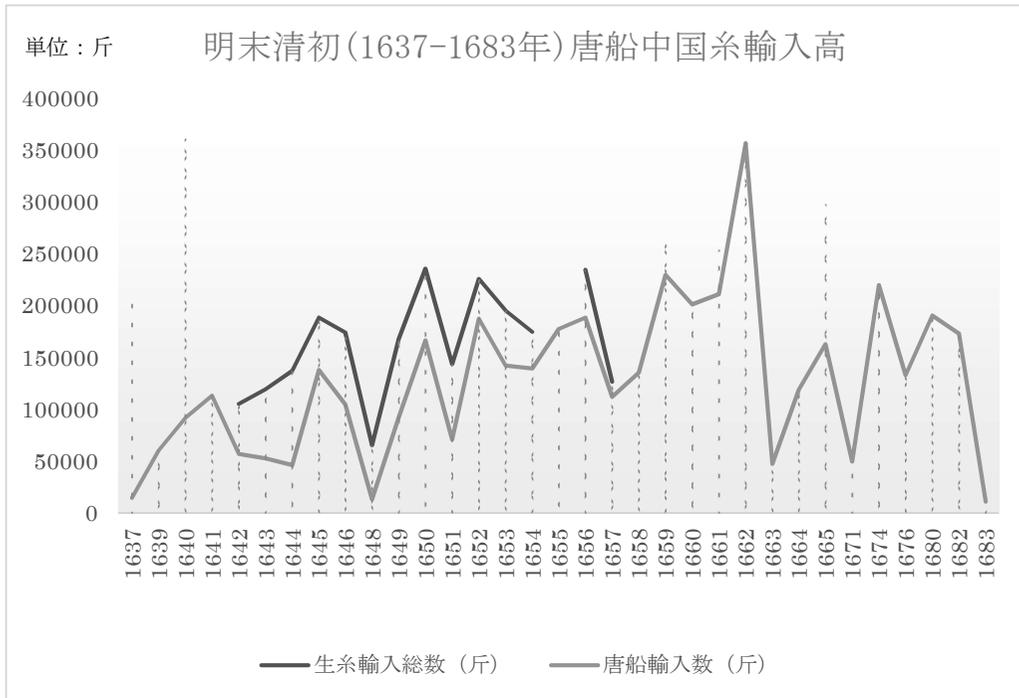


図1 明末清初(1637-1683年)唐船の中国糸輸入高表 (岩生成一, 1953)

表2は日本学者の山脇悌二郎によって整理されたものである。

表2 清代唐船中国糸輸入高 (山脇悌二郎, 1995)

年次	数量(斤)	年次	数量(斤)
1650	108,120	1716	342
1655	140,137	1719	7,691
1660	198,780	1724	6,128
1665	162,236	1728	8,549
1680	50,000	1732	23,500
1688	40,520	1736	10,599
1689	11,618	1737	849
1709	40,800	1738	4,499
1710	23,850	1797	3,930
1711	43,280	1804	2,413
1712	10,122		

表2で分かるように、17世紀中期に入ってから中国糸の輸入数量は、下がりつつあった。このような景況は18世紀に入ると、糸は対日貿易の重要商品として地位はすでに失われた。表1は糸の供給は需要を超える可能性を否定したので、生糸貿易量の激減の理由は以下の三点が考えられる：(1) 日本糸の生産量が増えた、(2) 江戸幕府の貿易政策の変化、(3) そして日本は中国に求める商品の变化である。この三つの推測の正否は、日本側の

中国糸輸入の詳細からでは見えてくるはずだ。

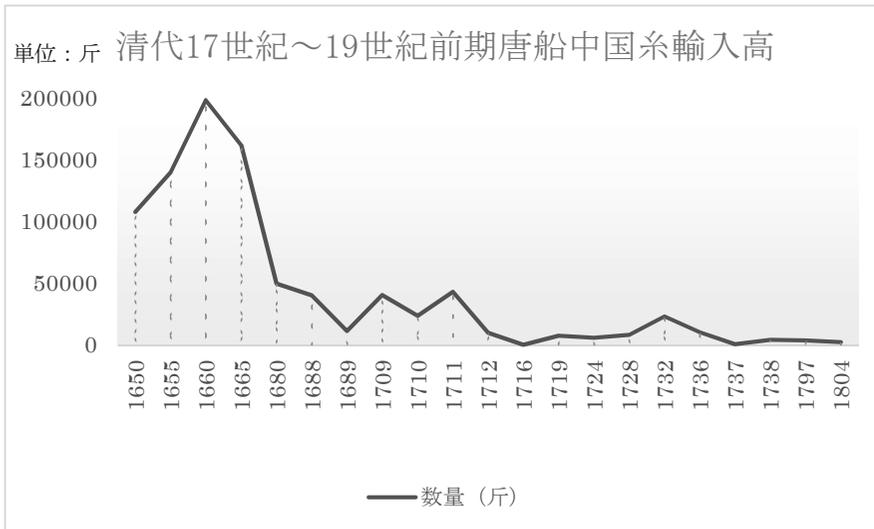


図2 清代17世紀～19世紀前期唐船生糸輸入高 (山脇悌二郎, 1995)

5. 17世紀以降の中国糸輸入の減少

中国糸の輸入激減は日本側の値段からでもはっきり反映されている。1683年清朝水師は台湾の鄭氏を破る前の海禁時代の時、糸の値段は下がる一方だった。1649年長崎の中国糸の値段は銀5両1銭、1672年は4両に、1699年は3.1両、1709年は2.9両だった。それ以降の減少の勢いは抑えられて、値段は安定になった。

図1でわかるように、1649年から1682年中国糸の需要は少なくともある程度に維持しているのは示した。値段の変化の原因は糸の代わりに商品が糸の市場を占領したではなく、中国糸の需要は減少したことによるものだと考える。

日本は中国糸を交換したものは、一部の日本刀、海産物など以外、多くは銀、黄金、銅である。清朝初め年の1648年から1672年の25年中、来日した唐船の輸入総額は32万余貫に達した。銀だけで20万貫に近く、総輸入額の61%に達した。その他9%は黄金、貨物はただ30%であった。1672年から1685年の12年中、唐船からもらった銀は72,400余貫であった。1709年長崎の公式報告によると、1648年から1708年の60年間で日本から流出した黄金はおよそ239,760両で、銀はおよそ374,200貫だった。1662年から1708年の46年間で、銅の流出はおよそ1,144,987,000斤だった。その中で中国に流出した銀、銅は最も多かった。

江戸幕府は貨幣用貴金属の流失の局面に対して、さまざまな方法を利用して唐船の来日を制限した。清朝の海禁を解禁した翌年度（1685年）に、中国との貿易金額を6,000貫に制限されたが、1688年は唐船の来日激増に対応できず、来日唐船の上限を70隻に変えた。その後8回の変更にわたって、1790年の10隻に固まった。日本の規制によって、唐船の来日数は規制通りになっていなかったが、数は確かに短期間に激減した。1711年から1795年の来日唐船の年平均数は13隻前後、1796年から1820年の来日数は10隻前後だった。来日唐船の減少の為、主な貨物の中国糸の取引に対して大きな影響を与えられた。

表2と合わせて見ると、1685年唐船来日規制令が下る前の1665年から1680年の間、中国糸の輸入はすでに減少していた。唐船は清朝海禁時代で来日の平均数は37隻にすぎなかったが、海禁終了の1685年からの5年間では年平均96隻に増加した、そして1686年からは73隻、1690年までは144隻に増加した。唐船来日数と中国糸の貿易量の減少は海禁終了前後の1665年から1690年で正の相関が見られないのではないかと考えられる。すなわち中国糸の貿易量の減少は唐船来日に影響があまりなく、あるいは影響があるとしても限りがあり、中国糸の激減と他の貨物の激増の相殺によって唐船来日数に影響がなかった。1665年から1690年の間の中国糸輸入数と唐船来日数の二つのデータを見ると負の相関の傾向が表れ、中国糸輸入の減少が唐船来日の積極性を促したのではないかと推測できる。だが全面的に見れば、唐船来日激増現象の本質は前文述べた通り、糸以外の人気商品があったと推測できる。また中国糸輸入の減少の原因は日本の糸生産技術の進歩と産量の上昇につながりがあるだろう。

6. 明治以前の日本糸生産概況

中国糸輸出量の減少は日本糸の競争力の上昇につながったと考える。江戸時代の日本糸の国際市場の競争力の上昇に注目して、同じ時期の中国糸輸入減少の理由を考察してみる。

弥生時代の絹織物の出土によって、シルクロードができる前から日本糸の歴史はすでに始めたと言われる。「魏志倭人伝」には、238年には邪馬台国の女王卑弥呼が中国の魏王に斑絹を贈り、その返礼として多数の高級絹織物が下賜されたと記述されている。当時、すでに日本独自の養蚕・製糸・染色技術があったと推測される。その後、大化の改新のころから増えた中国大陸や朝鮮半島からの渡来人によって、中国の蚕種や養蚕・製糸・染織などの先進的な技術が持ち込まれ、日本各地に広まり、各地で独自の発展を遂げ、多様な絹産地が形成された。

16世紀の桃山時代までは、日本のシルクの品質と値段は中国産にはるかに及ばず、大量に中国生糸が輸入された。江戸時代に入ると、日本は政治的に安定しており、社会経済と大衆文化は著しく発展していた。糸製品は軽くて涼しい、上品な感じがするなどの理由で、当時の消費者たちに愛されていた。しかし江戸時代の前期では値段も高く、大衆消費品にならなかった。だが安土桃山時代の前期から中国糸の輸入は積極かつ大量に行われた、そして両国の貿易の中で多くの人口の流動によって、技術と経験は紹介されたと考える。図1で分かるように、1644-1649年の中国戦乱の時、輸入量は外因で大きく減り、日本社会の需要は満たされなかったため、日本商人は、中国糸の代わりに商品として、自国製日本糸にも投資した。当時京都西陣織造工場と博多の糸工場などもこのチャンスを掴み、大きく発展し、江戸時代の日本糸のシンボルとなった。

西陣で織物生産を営んでいた秦氏ゆかりの綾織物職人集団は「大舎人座」と呼ばれ、東陣の「白雲村」の練貫職人集団と京都での営業権を争ったが、1513年(永正10年)の不知によって京都での絹織物の生産を独占した。さらに、1548年(天文17年)に「大舎人座」の職人のうち31人が足利家の官となり「西陣」ブランドが確立された。その名は京都に住んだ公家の中でもよく知られている。14代将軍徳川家茂は京都行きが決まると妻和宮に故郷の土産は何がよいかと訊ねたところ、和宮は生まれ故郷である京の名産は西陣織であるといったそうだ。しかし家茂は大坂城で亡くなり、和宮には形見となった高価な西陣織が届いた。和宮は悲しみつつ歌を詠んだという物語がある。

空蟬の 唐織ごろも なにかせむ 綾も錦も 君ありてこそ

(現世のきらびやかな織物が何になるというの 綾も錦もお見せするあなたがいてこそ価値があるのに)

また、数量から見ると、一例を挙げれば1755年の京都西陣を中心として32軒の和産織物の産量は882,055反だった。技術面から見ると、蚕の養殖業と養殖技術も大きく発展した。信州、上野などの国を中心の養蚕業は盛んだ。養蚕地の代表としての荒船風穴、技術の積み重ねの成果は田島弥平の1872年にまとめた「養蚕新論」を挙げられる。田島弥平は文政六年(1823年)で生まれ、その父弥兵衛は養蚕で財を成した人物であり、養蚕長者としてその名が知られていた。田島弥平の製糸業を中心としての活動とその成果は、1885年6月明治時代前期の農商務卿西郷従道から功労賞をもらった。

日本糸産業は16世紀から19世紀前半期にわたって長期的に見れば発展は大きく進んだ。社会的にも認められた成績と技術や産業の革新を基盤として明治以降の日本糸の世界的地

位に固めた。1858年江戸幕府が横浜・長崎・函館を開港し、欧米諸国との貿易をはじめたことをきっかけに、日本糸は日本の重要な輸出品のひとつになり、国際市場の競争に参加した。横浜開港により生糸輸出が増加し、翌年には国内で生産される生糸の半分以上が輸出されたといわれる。特に横浜は蚕糸の主要産地であった信州諏訪地方や上州前橋地方等から比較的近かったことから、横浜港からの生糸輸出は急速な発展をとげた。開港後わずか1年のうちに蚕糸は最も重要な輸出品となり、1862年には日本の輸出品の86%が生糸と蚕種になるまでに成長した。1872年明治政府はフランスの技術を取り入れて、当時世界で一番大きい製糸場の富岡製糸場が建設された。近畿地方でも、姫路製糸所、紀南製糸所などの神戸港に近い近代化糸工場が絶えなく建設された。そして当時の女権運動と共に、華族の娘も糸工場に勤務され、諸階層の民衆の中でも存在感が高かった。日本糸は東アジアだけではなく、アメリカとヨーロッパの市場まで占領して、明治時代の半ばで世界的に有名なブランドとして活躍された。

7. 中国糸対日輸出減少の原因のまとめ

中国産糸の対日輸入の減少した理由はおおよそ外因と内因の二つに分けられる。

外因は主に四つがある:外部の政治的に不安定要素の影響、西方の需要の増大、ライバル商品の出現、日本の自給能力の上昇である。政治的には、17世紀始めから明朝の対外戦争は戦敗の連続で国の安定性が確保できず、対外貿易に影響を与えたと考える。ベトナムやマニラなどの東南アジアの国の糸生産はオランダやスペインなどの国の糸産地や貿易港としてコントロールされ、糸の値付け権は中国だけではなくなくなった。マルコ・ポーロの『東方見聞録』に影響され、ヨーロッパ市場ではアジアに関する書籍が求める声が高くなった。日本では儒学学者の林羅山などの影響もあり、儒学の発展に応じて、江戸時代に入った頃書籍貿易は貿易の主役になって、糖類、薬材、染料、鉱物などは生糸や糸製品の貿易額の減少を補足して、貿易市場を充実した。

日本の自給能力の上昇は外因の中における主因であると考えられる。糸の織物の生産の基盤は生糸である。前文で述べた田島弥平父子をたとえとして、明治以前の養蚕技術の発展を表した。社会的な需要はアビラ・ヒロンの「日本王国記」の外国人の視点で糸製品の需要を記述した。和宮親子内親王の短歌で糸製品の文化的なシンボルとして反映されたように、糸生産と糸商売の歴史も紹介した。日本の鎖国は影響したが、その前から糸貿易は中国の戦乱の波にダメージを与えられ、戦乱が終わり、回復した時点で日本の糸産業はすでに大

量生産に投入し、養蚕業と織技術の革新的な発展を図った。1683年清朝は台湾の鄭氏を破れ、海禁を解禁したが、糸の貿易量は1660年の高さに回復できなかった。その時点で、日本の糸製品は中国の依存から脱出して、糸の自給ができる国になったかもしれない。

内因は主に四つがある:中国の流民一揆と統一戦争、内需の拡大、海禁や貿易関連政策のマイナス影響、そして糸生産の近代化スピードが比較的遅かったことである。中国の流民一揆と統一戦争は政治的要素として糸生産に影響しただけではなく、社会経済、地縁政治(geopolitics)、新しい民族の誕生、カルチャーショックなどさまざまな問題を引き起こした。内需の拡大に関して、1600年から1800年の中国人口は約0.6億から2.0億近くに増え、人口の増加は内需の拡大の主な要因だと思う。糸生産の近代化スピードは比較的遅かったことに関して、原因ではあるが、結果でもある。伝統技術の成熟と大量の応用は需要を満足させ、そして鎖国の状態を長期にわたって、技術の革新の環境は作られなかったため、糸生産の機械化工場も日本より遅く出現した。

海禁や貿易関連政策のマイナス影響は内因の中の主因であると考えられる。明清の海禁は対日貿易の積極性を抑えた。しかし明朝万暦時代の海禁はあくまで日本との戦争に対応して作られたものであって、日本はマニラなどの港を経由する貿易船の中でも生糸などの商品を獲得することができた。清朝の海禁は全面的と言われ、1684年は海禁を解禁したが、四の海関と広州一口の通商が外国の需要を満たさなかったのはアヘン戦争の原因になった。日本も海禁を同調して、長崎の出島の一口通商にこだわり、自由貿易の大門を閉ざされた。だが海禁は日本の糸自給を励ました。1711年54隻来日唐船は生糸50,267斤、糸綿織物2,002,149反(糸の織物は188,032反)、糖4,475,490斤、薬材778,860斤、顔料、染料570,817斤、鉱物332,760斤、皮革類85,821枚、書籍140箱2部であった。しかし1804年11隻唐船は生糸2,413斤、織物14,366反、薬材909,218斤、糖1,285,600斤、顔料と染料412,298斤、鉱物270,543斤、皮革類2,294枚になった。比較した結果は、糸と糸製品の比例が減り、薬材、鉱物、顔料、染料の比例が著しく上昇した。これらのデータに基づいて、仮に唐船の数は減らないとしても、生糸と糸製品の著しく減少する可能性もある。前文に述べた京都織物産量の882,055反に比較して、解禁後唐船の数量は一時的に激増したが、糸の産量の増加は正比例にならなかった。中国側の海禁は糸の対日貿易の影響に関して限りがあるという結論につながると思う。

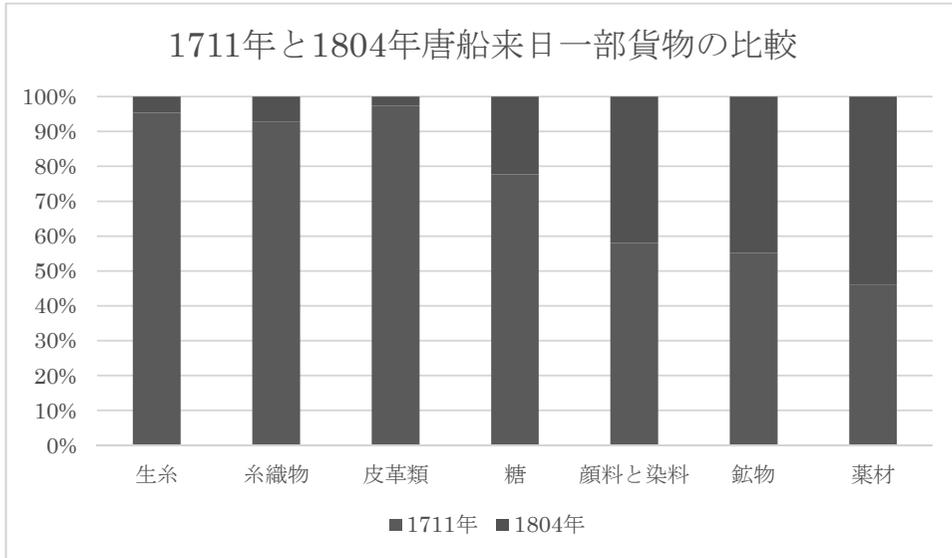


図3 1711年と1804年唐船来日一部貨物の比較（山脇悌二郎，1995）

図3は以上のデータの一部をまとめて、二つの時代の商品輸入量を比較したものである。100年近い時代の中で糸と糸の織物の貿易量だけでなく、両国の商品別貿易量の変化を示すことができる。1804年の時の大口商品輸入の中で、薬材などの輸入は主流となり、生糸はすでに主な輸入商品ではなかった。

8. まとめ

今のグローバル化市場経済の環境の下では、むかしの貿易は成熟した市場での競争だけではなく、非経済的な要素に大きく左右されるのを想像することが難しいだろう。16世紀の前に東アジアでの「朝貢貿易」は、主な目的は儲けるではなく、文化交流と外交活動のイメージが強かった。そして17世紀からの貿易でも、ビジネスチャンスは政治的な行為に影響されやすく、一つの政策だけで億単位の商売を水に流すようなリスクが大きかった。

だが17世紀から19世紀の貿易史の中で、いくら政府からの鎖国と海禁の影響があるとしても、生活と社会発展を維持するために、密輸のリスクを抱えて貿易が絶えず行われた。そしてマニラなどを経由して、政策と法律の空白を利用して貿易を続けた。もちろん法律違反は勧められない策だが、貿易保護主義でも得策ではなく、ある意味では貿易の過保護は社会経済にネガティブな影響があるのを説明できると思う。1840年のアヘン戦争と1853年のペリー来航は、貿易紛争が主因とされる事件である。現在では貿易問題の解決は

法律と貿易条約を基づいて行われているが、当時の貿易紛争の解決は主に政治的な手段で行われたため、いざ戦争になった時、当事国の代償は大きかった。

鎖国と海禁にもたらず結果はそれだけではない。糸貿易の数量の増減の中で、日本は中国糸を利用できないリスクを抱えていたことを認識し、イノベーションと技術革新を図り、自分のブランドを立てた。そして他国への依存を減少する考えは、江戸時代が生み出したものではないかと考えている。だからこそ日本は東アジア諸国を先に明治維新を実施し、近代化強国になるのを目指していたのではないかと推測する。

結果的に、鎖国の年代に中国と日本両国とも海洋文明としての発展は一時頓挫した。それは世界貿易の方向に背いたが、陸地の貿易文明の発展は一時的に広がった。日本では近江商人、伊勢商人などは海の交通ルートを頼って商売をなすことではなく、鎖国時期に陸地での奔走のおかげで商売を大きく広がり、江戸時代の経済を豊かにしたのではないかと考える。中国では山西省商人「晋商」は内地のビジネスチャンスを掴んで、北はシベリア、南はベトナムへの大陸貿易ルートを開発したことと似ている。

いずれにせよ、17世紀から19世紀の中国対日糸貿易量は、前文の考察で述べたように減少する結果に至った。先行研究が多かったが、数多くの視点で研究できる問題なので、今後の研究の基礎として以上の内容をまとめた。

9. 注：

- 1.木宮泰彦：「日中文化交流史」 p.532,533。
- 2.アビラ・ヒロン：「日本王国記」 p.66。岩波書店，1965年9月13日。
- 3.1 丈=10 尺=3.333m 「漢語大詞典(普及本)・中国歴代衡製演變測算数簡表」，上海辞書出版社第1版。
- 4.アビラ・ヒロン：「日本王国記」 p.66。
- 5.朱国禎：「涌幢小品」 卷30，“倭官倭島”。上海古籍出版社，2012年11月。
- 6.岩生成一：「近世日支貿易に関する数量的考察」，「史学雑誌」第62編第11号，1953年11月。
- 7.山脇悌二郎「长崎の唐人貿易」 p.229。
- 8.「长崎の唐人貿易」 p.27。
- 9.「近世日支貿易に関する数量的考察」。
- 10.「日中文化交流史」， p.627-641。

11. 「朝日新聞・天声人語」, 2007年10月14日。
12. 日本布類の長さ単位: 長さ二丈六尺(約10m)以上, 幅九寸五分(約3.6cm)以上を一反の規格とする。これで成人一人分の着物が作れる。「長崎の唐人貿易」p.235。
13. 群馬県経済部農産課 『上毛篤農伝・第一集』群馬県1951, p.129。
14. シルクと暮らす <http://www.katakura.co.jp/silk/story/>
15. 「清朝人口数字の再估算」, 駱毅, 北京大学经济学院, 「経済科学」1998年06期。
16. 「長崎の唐人貿易」, p.108-109, p.320。

10. 主な参考文献:

1. アピラ・ヒロン: 「日本王国記」, 岩波書店, 1965.9.13, p.66。
2. 木宮泰彦: 「日中文化交流史」, 商務印書館, 1980.4, p.532, 533。
3. 朱国祯: 「涌幢小品」上海古籍出版社, 2012.11, 卷30。
4. 岩生成一: 「近世日支貿易に関する数量的考察」, 「史学雑誌」第62編第11号, 1953.11。
5. 山脇悌二郎: 「長崎の唐人貿易」, 吉川弘文館, 1995.6, p.108-109 p.229 p.320。
6. 上田信: 「海と帝国: 明清時代」, 講談社, 2015。
7. 黄云眉: 「明史考証」, 中華書局, 1986。
8. 黄仁宇: 「十六世紀明代中国之財政与稅收」, 生活・讀書・新知三聯書店

¹ 1斤=16両=160錢=592.8g (漢語大詞典(普及本), 「中国曆代衡製演變測算數簡表」, 上海辭書出版社第1版, 2012)